



NEWSLETTER

保育・子育て総合研究機構だより

2013.10.1 発行 NO.29

公益社団法人全国私立保育園連盟 保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

お誘い

「子ども理解」を語り合い／分かち合いませんか …第39回保育総合研修会第8分科会 「子どもとの出会いを語る」

❖高温注意報

みなさん、こんにちは。この「ニューズレター」がみなさんに届く頃は、季節もすっかり秋本番になっているのだと思いますが、今年は昨年以上に記録的な猛暑／酷暑の夏でしたね。

私が子どもの頃（50年も前の話ですが）、「今年の夏は暑いね」といっても、せいぜい30℃を超えるくらいだった気がします。それが半世紀経って、40℃を超えるような猛烈な暑さになるなんて、誰が想像できたでしょう？

今、保育園に通ってきている子どもたちが、社会の責任を中堅で担うようになる頃は、どんな気象環境になっているのでしょうか？エアコンが夏の生活では放せなくなって、テレビやラジオは「絶対外に出ないください！」なんて警告を頻繁に流す。そして、エアコンシールドの中で、身を潜めて夏が通り過ぎるのをじっと待つなんて光景は想像するだけでスリラーの世界ですが、当たらずも遠からずの経験を今年みんなでしたように思うのです。食物は、エネルギーは、確保できるのでしょうか？

1987年に、「環境と開発に関する世界委員会」は報告書「Our Common Future」の中で、「持続可能な開発（Sustainable Development, SD）」という考え方を示しました。ここでは、「将来にわたって経済活動を維持し続けるためには開発は必要だ。けれど、開発がもたらす環境破壊とのジレンマがあって、その手立ては節度をもった開発だ」としています。

節度？「そんな甘いものじゃないぞ」「もっとすごくなるぞ」「まだ開発を続けるのか？」と神様や仏様が今年の夏を借りて、私たちを、人類を、試しているのではとさえ思ったほどでした。みなさんはどう思われますか？

❖未来につないでいかなければならないもの

未来への持続を可能にしなければならないもの、それは私たちの「生命」も同じです。500万年ともいわれる人類の歴史ですが、私たちの祖先が代々生命を守り、育て、大切につないでくれたお陰で、私たちはこうして生まれてきて、生きて暮らせているのです。つないでくれた人の数を試しに計算してみたら、私の父と母にそれぞれの両親がいて、祖父母までで祖先が6人いるわけです。そして、そのまた親がそれぞれに2人ずつと15代遡ると、なんと**65,534人も**のDNAが私に引き継がれているのです。守りつなげてきてくれたことに感謝と同時に、大河のように流れつがる生命の不思議さを感じます。

こうして連綿とつないできた生命が、未来に向かってまた次の新しい生命につながっていく。そう、赤ちゃんの誕生です。

生まれ出てくる赤ちゃんとお母さんの最初の出会いについて、臨床心理士の橋本洋子さんが千葉県で行われた全私保連の全国私立保育園研究大会（2000年）で語ってくれたのは、「子育ては親と子が育ち合うプロセス」だということでした。講演で紹介してくれたのは、ある出産のエピソードです。今、生まれ出てきたばかりの赤ちゃんが、お母さんのお腹の上に預けられたところから話が始まります。

お腹の上の赤ちゃんを、お母さんは最初“得体の知れないうごめく物体”ととらえ、戸惑います。恐る恐るその物体を触ってみると、全身に産毛が生えていることに気づく。爪が生えていることにも気づく。そしてこのお腹の上にあるものは、物ではなく生命あるものだということがわかってきて、なにか夫の骨格に似ていることにも気づくのです。

うつ伏せの赤ちゃんがお母さんのお腹の上で必死に首をもたげている。これは、おっぱいを探しているの

では？助産師さんもそのことに気づいて、「お腹が空いているの？」と、小脇を抱えてお母さんの乳首を含ませてあげるのだけれど、赤ちゃんはすぐに離してしまう。でも、首をもたげる行為は続いて、お母さんはお腹の向きを少し変えたりしながら、赤ちゃんのおっぱい探しを応援する。そしてついに、赤ちゃんはおっぱいにたどりついて、乳首が口に触れたと思ったら、くわえてぐいぐいと吸い始めたということでした。

この時のお母さんの気づきがとても素敵で（後日手記を残されて、そこからお母さんの気持ちを知ることができた）、「傍で何かさせよう（おっぱい吞ませよう）」と思ってもしないのに、自分でしようと思ったらするんだ」ということです。生まれたばかりの赤ちゃんが、もうお母さんに大事なことを気づかせてくれている。こうして親も育つ。だから子育ては、親と子が育ち合うプロセスなのだというわけです。

ここで気づくもう一つの大事なことは、生まれ出てきたばかりの赤ちゃんが、おっぱいを自ら探す力を持っている（赤ちゃんは、匂いでおっぱいのあたりがわかるそうですね）。乳首が唇に触れたらそれをくわえて、呑む能力が備わっている。おっぱいの匂いが、探す／触れた／くわえる／呑む行為を発現させたので、**親から引き継いだ生命の情報が、生きる力のスイッチを次々に入れて目覚めさせ、自らが活動を起こすことを支えているのです。**

❖ウグイスはカラスになれない

故人になられてしまいましたが、動物行動学者の日高敏隆さんが滋賀県の大津で開かれた全国私立保育園研究大会（1998年）の記念講演でこんな話をされたことがありました。ウグイスの子にいくらカラスの鳴き声を聞かせても、そっぽを向いている。でもウグイスの声を聞かせると、関心を示し、学習を始めるのだそうです。とても重要なことを示唆してくれていたのだと、今頃になって気がつきました。つまり、ウグイスの子は親から引き継いだ生命を、次の世代にバトンタッチする必要がある、そのために必要な機能をDNAとして親から受け継いで生まれてきている。だから、カラスではなくウグイスの声に反応するように、**身体の仕組みがなっている。しかし仕組みだけではだめで、それを支える環境（ここではウグイスの声）が重要なのだ**ということでした。

私たち人間の赤ちゃんも、人間として育っていくDNAを親から受け継ぎ、必要な刺激がもたらされるとスイッチが入る。そういう身体の仕組みと、入ってきた情報の中から人間に必要な情報を処理する脳の働きも受け継いで、今という時代（時間）を引き受けて生まれてきたわけです。

全私保連「保育・子育て総合研究機構」研究企画委員会（以下単に、企画委員会）の社会化プロジェクトチームが今取り組んでいる「保育・子育てをグランドデザインする」という課題も、人間が人間として受け継いだ能力を発現させながら学び育ち、未来に向けて確かな生命のバトンタッチをしていくために、必要な環境や保育・子育てのありようを明らかにして（誰もが知っている共有知／社会知／社会化）、**未来への希望につなげたい**ということでした。

❖「わく ワーク シート」プロジェクト チームの仕事

企画委員会には、もう一つのチーム「わく ワークシート」プロジェクトチームがあります。このチームのアプローチは、**まずはありのままの子どもを知ろう**ということ。子どもには生きる力／育つ力が備わっているのだという信頼を出発点にして、保育の実践者であるみなさんと一緒に、まずは子どもと向き合ってみよう。そこで気づいたことを語り合ってみよう／分かち合ってみよう。そこからまずは始めてみようということ。具体的には、子どもと向き合うための**素材を開発して、園内研修への招待状を**という想いで、みなさんに発信をしたいということでした。

ところで、そのきっかけになったのは、ニュージーランド（以下、NZ）が保育評価の手法として取り入れている「ラーニングストーリー（学びの物語記録）」との出会いでした。

「保育の質」を高めたい、それはみんなの願いですが、その手立てを、日本では市場原理による競争と、第三者評価や後から加わった自己評価を活用するとしています。しかし、競争や他者評価、あるいは生産管理や品質管理の手法を用いた自己評価を保育に持ち込むには違和感があり、また一人ひとりの子どもの学びや育ちを保障するには無理があるのではないか。それに対してNZでは、保育者や子ども・親等も含めた当事者自身が保育のふりかえり（アセスメント）に参加して、

子どもの学びや育ちを共有して、学び合い／育ち合いをしているのです。

❖ 学びのとらえ直し

これまで私たちは、保育にせよ教育にせよ、保育者（先生）という知っている人（そう思い込んでいる大人）から、子どもという知らない人（と思われてしまっている子ども）へ、一方向的に伝えることが保育であり、それをするのが保育者の役割と思いついてきたのではないのでしょうか。それは、保育者自らの一般的な学校での授業体験が根っこにあり、保育もそのイメージをモデルにして描き出すことを当たり前と生きてきたことと関係しているように思うのです。そこで、関心も多くが指導者側から見た指導方法に向けられ、指導したい私、何かしてあげていないと落ち着けない私が、心の中にいつも住んでいたように思うのです。

ところが実際は、「どこでこんなこと覚えて来たの？」とか「えっ？いつの間に？」という具合に、先生という私がすべてを教えられているわけでもなく、なんでも知っている人でもなく、子どもは知らない人どころか知っていることがたくさんあり、大人の理解や想像以上に、夢中になったり考えたり、挑戦したり悩んだり、相手の気持ちがわかったり、失敗しながら乗り越えたりを、仲間の力を借りながらも自らの力でこなしていることに気づくのです。

NZでは、子どもに内包されたこうした力（有能さ）に信頼を寄せて、子どもが今、ここでどんな学びをしようとしているのか？しているだろうか？と、子どもの表現を学びの姿として受けとめ、記録して、同僚との語り合い／分かち合いを通して子ども理解を深め、その姿に意味づけをしていく、意識化していく（子どもにも返していく）。そして、そこから学びをより力強くしていくための次の手立てを導き出す、この一連の流れを「評価」と位置づけているのです。そして、子どもや親やもっと広い関係にまでふりかえりへの参加をうながして、ともに学び、ともに育つ共同関係をも創り出しているのです。

❖ 子どもや親も参加して

共同分析することの価値

「学びの物語記録」を使った子ども理解のための共

同分析の価値について、評価モデルの開発を中心的に担ったマーガレット・カーは、次のように述べています。

- 1 個々の子どもたちを理解し、親しくなり、一人ひとりに「かみあった」保育ができる。
- 2 記録を、他の人との議論の資料として使うことによって、子どものことがよく理解できる。
- 3 同じ保育の場にいる人々と情報の共有ができる。
- 4 実践をふりかえることができる。
- 5 一人ひとりの子どものための計画も、グループとしての計画も立てられる。

その他にも、子どもたち自身が自分のアセスメント（プロセス評価／ふりかえり）に参加できることや、保育のプログラムについて家族と話し合えること、家族と経験を分かち合えることなどが挙げられる、と述べています（マーガレット・カー・著、大宮勇雄・鈴木佐喜子・訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』ひとなる書房、2013年6月）。

❖ 私たちも学びたい、

そして「学びの素材」の開発を

そこで、私たちもこのような実践を体験的に学ぶことができたなら、開発者の一人であるドーリーン・ロンダーさんを東京に招いて開いたセミナーは、新しい形の研修の枠を提供した、とドーリーンさんも語ってくれたように、これまでの研修のあり方を一変させるものでした。それは、みんなが当事者になって参加する体験的学びの場だったのです。そこで、もっと多くの人に同じような体験をしてほしい／紹介したいとつくったのが『ワークブック I 保育園における「子どもの育ちと学びの分かち合い」への招き』（2007年／同改訂版、2012年）です。

このワークブックには、セミナーでも素材として取り上げた保育の場面（動画）が二つのアクションとしてDVDに収録されています。また、最近はデジタルカメラが私たちの身近な道具になってきたので、写真を使ったアクションも一つ紹介してあります。園内研修として職場の同僚と気軽に取り組めるので、子どもが見えるようになる、保育が見えるようになると、大学の先生や幼稚園の先生たちからも引き合いや紹介の輪が広がってきています。

❖「わく ワーク シート」Exciting Work² sheet

企画委員会では、このワークブックの理念と実践のおもしろさを、もっと多くの人に知ってもらいたい、体験してもらいたい、子ども理解を深めてもらいたいという想いで、「わく ワーク シート」プロジェクトチームを2年前に立ち上げました。このチームからは、園内研修等の時間を上手く見つけ出して、ぜひ取り組んでほしいという願いから、取り組みやすい新しい素材の提供をと、「わく ワーク シート」を年に3回のペースで発行することにしました。発行はシリーズの1「こどもとであう」から始め、これまでに1-1~1-3を発行してきました。

シートの各号には、保育の日常から切り取った子どもの姿が紹介されています。写真には吹き出しが添えられているのですが、私(保育者や親)がその子になったつもりで、この時の気持ちはこんなかな?と試しに吹き出しに言葉を入れてみる。同僚と一緒にやってみると、いろんな言葉が入ってくる。その言葉を話題にして、一緒に話し合ってみると子どもの気持ちが見えてきておもしろいのです。楽しいからやってみましょう。1時間位の時間をつくることができれば、取り組めるワークです。

ワークシートで紹介した事例を職場で練習としてやってみて、今度は自分たちの保育の中から、「ねえねえ、こんな子どもと出会ったんだけど」と一緒にやってみることに繋がってほしいのです。

読み解いてみると、もっと子どもの姿が見えてきます。そしてそのことが、保育者自らの成長の実感にもつながる可能性があることが、これまでの園内研修や地域の合同研修会に参加した人たちの感想からも確かめられているのです。

❖子ども理解のおもしろさを

保育総合研修会で一緒に語り合いませんか

「わく ワーク シート1-3」(「保育通信」2013年6月号に同封)は、保育園の一日を追いながら、関心を向けなければ通り過ぎてしまいそうな、子どもとの朝の出会い、午前や午後のお会い、食事やお昼寝での出会い、夕方の出会いをとりあげました。

明年1月29日~31日に開催される第39回保育総合研修会(この「ニューズレター」と一緒に、開催要綱が同封されています)の第8分科会「子どもとの出会

いを語る」では、このシートを使って、ドーリーンさんも新しい研修の枠と評してくれた「子ども理解の分かち合い(共同分析)」を体験してほしいと考えています。

シートの裏面は、皆さん方の園の子どもたちとの出会いの写真を貼るようになっています。一日を追って写真を貼っていただいた「わく ワーク シート1-3」でもいいし、写真1枚だけでもよいので、持ち寄って、一緒に「子どもとの出会い」の物語を語り合しましょう。

語り合い/分かち合うことで、こんなにも子ども理解が深まり、保育が豊かに変わっていくことを、ぜひ一緒に体験しましょう。お待ちしております。

(鈴木眞廣●保育・子育て総合研究機構研究企画委員会委員長
/千葉・和光保育園園長)

編集後記

◎DNAをどう受け継ぎ、進化させるのか

ここ数年の異常気象が常態化すると、もはや異常ではなく、「標準」になるかもしれません。何万年と脈々と続いてきた人間社会は、わずか200年間(産業革命以降)、そして、ここ20年間(IT化)で大きく様変わりしました。それを、どのように解釈し、これからの保育をどのように描けばよいのでしょうか。

鈴木委員長は、「人の命は、ヒトのDNAを脈々と受け継ぐと同時に、親子の《育ち合う関係》で存続する」、ウグイス、カラスの例を用いて「《かかわり合う適切な環境》が必要。それによって命をつないできた」と論及されています。おそらく有史以来、保育・子育ては、コミュニティの中で「大人集団と子ども集団の響き合う関係性」「子どもどうしの土臭い関係性」、その両輪で営まれてきたのだと思います。

今回、「わく ワーク シート」プロジェクトチームの仕事と意義について述べられています。ぜひ「わく ワーク シート」を使って、保育の質を高め、乳幼児は元来、育つ力を備えた有能な学び手であることを実感していただければと思います。

我々が、保育の先達のDNAを受け継ぐためには、その歴史に学ぶだけでなく、同時に《育ち合う関係》《かかわり合う適切な環境》をつくり出さねばなりません。

「子どもと出会い、子どもを語り、分かち合う」(本文より)、それらは、きっと新たな「標準」(保育の進化)に結びつくだろうと思います。たとえ、気象環境や社会が大きく変化したとしても…。

(片山喜章●神戸市・はっと保育園園長)

❖問合せ

公益社団法人全国私立保育園連盟
保育・子育て総合研究機構研究企画委員会
〒111-0051 東京都台東区蔵前4-11-10
TEL 03-3865-3880 / FAX 03-3865-3879
URL <http://www.zenshihoren.or.jp>
E-mail ans@zenshihoren.or.jp